

コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性

— A 園の事例から —

園田雪恵（山陽学園短期大学）

本研究は、コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性について検討することを目的とする。今回は、A 園が YouTube を活用していることに着目し、YouTube の情報発信による効果の可能性について検討を行った。A 園が一般公開している YouTube 動画のうち、コロナ禍の 2020 年 3 月から配信されている 107 の動画に限定した。これらの動画の内容を分類した結果、19 の小カテゴリーを抽出した。そして、視聴者にはどのような情報獲得があったのか、その可能性について検討を行い、6 つの大カテゴリーに分類した。6 つの大カテゴリーは、「園での普段の子どもの姿を見ることができる」、「園の行事や習い事について知ることができる」、「園の新型コロナウイルスへの対応方法や対策について知ることができる」、「園と地域が連携し継続的に取り組んでいる活動について知ることができる」、「園環境について知ることができる」、「子どもの視点で園の活動を疑似体験できる」である。コロナ禍の幼児教育・施設において、これらの YouTube 活用における情報発信の効果の可能性があることが示唆された。

キーワード：コロナ禍、YouTube の活用、情報発信、保育

1. 問題と目的

新型コロナウイルスの感染拡大は、様々な方面に大きな影響を与えている。日本では、新型コロナウイルスは、幼児教育・施設においても、甚大な影響を及ぼし続けている。松本(2021)は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を災害として捉え、東日本大震災の影響と比較し、いずれも生物学的側面や社会的側面のみならず心理的側面においても様々な影響を及ぼしていることを指摘している¹⁾。つまり、新型コロナウイルスが世界に負の影響を与え続けていたことを考えると、コロナ禍は災害と同じ状況であるといえる。

保育所においては、2020 年 1 月 31 日に厚生労働省から感染対策にかかわる通知があり、これまでの保育の形態を変えていかなければならない状況となった²⁾。認定こども園においても、2020 年 2 月 3 日に内閣府から、新型コロナウイルスへの対応について通知があり、コロナ禍の対応をしていくこととなった³⁾。そして、日本の新型コロナウイルス感染者数が増加し、感染拡大予防のため、2020 年 2 月 27 日に学校において全国一斉臨時休業の措置が講じられた。幼稚園は、3 月から臨時休園となる場所が多くなった⁴⁾。この頃から、日本の保育・教育分野においての本格的なコロナ禍に突入した。

コロナ禍により、人と人が直接顔を合わせて行っていたことが難しくなり、様々な活動について密を避けることが求められるようになった⁵⁾。鮫島・甲田(2021)によると、多くの園で、行事の見直しが余儀なくされ、卒園式が取りやめとなった園もあった⁶⁾。分散登園で、少人数の保育をする園もあった。2020 年 4 月 7 日には、緊急事態宣言により、多くの幼稚園が休園に追い込まれ、当たり前のように会えていた園の保育者や友達と関わる事が出来ない事態になった⁷⁾。また、保育所や認定こども園においても、感染者が出た場合には、休園の措置を講じることになり、対面保育の実施が出来ないところも出てきた⁸⁾。

家庭においては、在宅勤務が拡大し、親が仕事をしながら子どもと一緒に過ごす時間が増えた。池本(2020)によると、子どもと一緒にいる時間の増加はプラス面であるが、国や自治体の対応の結果、様々なマイナスの影響があったことを述べている⁹⁾。子どもの過ごし方に悩んだり、孤立感や閉塞感を感じたり、子育てが嫌になったなど困り感を抱えた保護者がいたということである。このようなことから、

コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性

コロナ禍では子育て家庭の親子が孤立しないよう園と家庭をつなぐ方法を検討することが望まれる。

境ら(2021)によるとコロナ禍がもたらしたあらゆる制限は、生活を土台に人的要素を含む保育環境と密にかかわることを基礎とする日本の保育・幼児教育の基本原則を根本から揺るがすものであると指摘している¹⁰⁾。そして、このコロナ禍がオンライン保育や教材の郵送による遠隔保育といった新しい試みが発祥したことは、保育の文化的転換点であると述べている¹¹⁾。これまで、乳幼児期は、直接的な体験が重要とされてきた。しかし、オンラインや遠隔というキーワードを持つコロナ禍においては、子どもにとって、間接的な体験も、直接的な体験と同様に必要なものと考えられる。

汐見(2021)は、保育において試行錯誤の実践が続いているが、コロナ禍の今だからこそ、子どもの日常のリアルな育ちを伝えることで、保護者への理解へとつなげていくことが必要であると述べている¹²⁾。また、日本は諸外国と比較し園の行事が多く、行事開催が不可能になったこの機会に行事の在り方を見直し、本当に必要な行事なのか検討する必要性についても言及している¹³⁾。そして、様々な業務の改善において、ICTの導入が有効であることを示している。一方で、汐見(2021)は、ICT導入について消極的な園もあり、長年続けてきた手書き文化への愛着にコンピューターへの苦手意識もあいまって、これまで保育の分野でICT化が進まなかったことを指摘している¹⁴⁾。

人と人が直接触れ合うことを制限されるなかでは、保育の現場においてICTを活用し実践することが求められている。文部科学省は、幼児教育の振興のために、ICTを活用することを推進している。オンラインによる保育や研修、コロナ禍における「新たな日常」に対応できるようにICT環境の整備を行っている¹⁵⁾。また、厚生労働省でも、「保育所等における業務効率化推進事業」を打ち出し、ICTシステムを導入する保育所に補助金を交付し、ICT化を推進している¹⁶⁾。内閣府においても、「新型コロナウイルス感染症対策支援事業 ICT化推進事業」として、同様にICT化を進めている¹⁷⁾。このように、保育・幼児教育におけるICT化は、関係省庁においても推進されているのである。

そして、新型コロナウイルスの影響を受け多くの幼児教育・施設がICT化に取り組んできた。文部科学省では、「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」として、ネット上にアップし、様々な園のICT化への取り組みを紹介している¹⁸⁾。「動画の配信」、「園のホームページを使った情報発信」、「オンラインで同時双方向のコミュニケーション」、「決まった時間にオンラインでクラス会を実施」など、もし子どもが園に通えない状況になっても、様々な方法で家庭と園を繋ぐための方法について掲載されている。具体的には、次のような取り組みである。ミナクル幼稚園では、園でいつも踊っている体操を配信した。また、鳴門教育大学附属幼稚園では、歌やゲーム、手遊びなど家族で楽しめるものを動画配信した。富士中央幼稚園では、保育者が身近な素材を使い自由に工作する様子を動画配信し、家庭での遊び方について伝えている。武蔵野東第一・第二幼稚園では、Zoomを活用し、担任と子どもが繋がる工夫をしている。七松幼稚園では、「Google for Education」を利用し、オンライン保育を実施した。園が再開した際に、円滑に子どもが生活に馴染めるようにする支援として、園再開後の告知方法や再開の準備状況の情報発信の方法について、各園の取り組みを紹介している。様々な園が、試行錯誤しながら新たな保育の形を見出していることが窺える。

企業においても、オンライン保育を実践している。ベネッセでは、自宅で過ごす時間が増える家庭の状況を受け、「オンライン幼稚園」をライブ配信している¹⁹⁾。「こどもちゃれんじ」の会員に限らず、無料視聴ができるようにしている。平日10時から4時頃まで、同じ保育者が登場し、「あさのあいさつ」から始まり、オンライン上で子どもに語りかけるように保育を行っている。ベネッセの発表によると、世界90か国以上の20万人が視聴しているとのことである。オンラインでは、様々な地域や国を超えて繋がるのが可能となる。高橋(2021)によると、インターネットは、動画配信が可能になった時点で、動画を通じて情報発信が可能となったと述べている²⁰⁾。つまりは、一般にむけて動画配信することにより、その動画内容について、不特定多数の人に情報発信していることになる。幼児教育・施設が、一般にむけて情報発信することで園以外の多くの人々にその園の情報を拡散することができる。

情報発信の方法として、YouTube動画の配信も一つの手立てである。YouTubeの特徴について、室田

(2007)は、誰もが参加できる動画サイトであり、新たな発想を生み出す動画サイトであると述べている²¹⁾。また、渡辺(2017)は、YouTube は、時間がないときでも短時間で視聴でき、テレビに比べて視聴者が自分好みの視聴方法で利用できるという特徴を持っていると述べている²²⁾。

保育の分野でも、YouTube を情報公開のツールとして活用しているところがある。社会福祉法人国立保育会では、法人規定について一般公開している²³⁾。また、大阪市港区では、保育施設の紹介をし、入園希望の子育て家庭にむけて、園見学の一助として配信している²⁴⁾。

YouTube で、「幼稚園」「保育園」「こども園」とそれぞれ検索してみると、多くの園が、チャンネル作成をしていることがわかる。それぞれの園の動画を見ると、子どもが遊んでいる様子や行事など、何気ない園の日常の動画や、保育者がダンスを踊ったり、遊びを紹介したりして一般にも公開している。

保育者が登場している動画は多くあげられており、子どもや保護者が楽しむことを目的としている。園舎の外観や内部を紹介しているものもあり、施設についてわかりやすく解説されている。今回、YouTube に焦点をあてた理由は、幼児教育・施設側から様々なテーマで情報発信されることにより、これを視聴する側には、何らかの効果があると仮定したからである。

コロナ禍に YouTube を活用し、情報発信することにより、視聴者には様々な情報を得ることができる。保育の分野でも YouTube は多く活用されているものの、これについての視聴者へ及ぼす効果の可能性については検討されていない。コロナ禍前より YouTube を活用している幼児教育・施設は多くあるものの、幼児教育・施設が発信している YouTube の視聴者側に立って、その情報を得られる効果の可能性を検証した研究は、まだない。特に全国的に登園を規制されていた幼児教育・施設では、YouTube を活用したところは多いものと考えられる。この時期の幼児教育・施設における YouTube の情報発信に着目し、これを活用することによりどのような情報発信の効果があるのか検討することは意義があることと考えられる。本研究では、YouTube を数年前から活用している幼保連携型認定こども園の動画から、コロナ禍に YouTube で情報発信することによる効果の可能性について検討を行う。

2. 方法

(1) 調査方法と分析方法

① 調査対象園とその選定理由

調査対象は、九州地方のある幼保連携型認定こども園である。この幼保連携型認定こども園について、これ以後 A 園と表記する。A 園は、環境教育に力を入れ、音楽や造形など感性を育むことを重視している。YouTube 動画のなかには、子どもが様々な環境とかかわる姿が多くあげられている。なお、A 園では、一般公開している YouTube 動画以外にも、通園している園児の家庭のみに限定公開している YouTube 動画もある。再生時間は、一部を除き 2 分程度のものが多く、短い時間で視聴できる。子どもがアクションカメラをつけて撮影している動画を除き、撮影者は園長である。園長は、YouTube 動画の活用方法についての研修を受け、視聴者が閲覧しやすい再生時間に配慮している。

A 園では、コロナ禍前の 2016 年から YouTube 動画の配信を行っており、2022 年 2 月 4 日時点で 185 の動画をあげている。この時点で、あげられている動画のなかで最も多い視聴回数は、2017 年 9 月の給食場で 112,602 回であった。また、この時点で最も少ない視聴回数は、2020 年 7 月のタブレットで稲の観察をしている場面であった。A 園で YouTube 動画が初めてあげられた 2016 年 9 月から 2020 年 2 月までの 3 年半で 78 の動画を配信し、それ以降のコロナ禍に突入した 2 年間で 107 の動画を配信している。コロナ禍前とコロナ禍では、明らかにコロナ禍の方が、頻繁に動画をあげられている。つまり、A 園は、コロナ禍で YouTube を積極的に活用していることになる。したがって、コロナ禍となり、YouTube を活用している園は多く存在するが、長期的に YouTube を活用し実践している園の 1 つとして抽出しても問題がないと判断し、調査対象園とすることとした。

② 分析期間

A 園が完全にコロナ禍の影響を受けていた 2020 年 3 月 2 日から 2022 年 2 月 4 日までの YouTube 動

コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性

画を分析対象とした。

③分析手順

A 園の許可を得て、一般公開している YouTube 動画について分析を行った。上記の期間の YouTube 動画のうち一般公開している 107 の動画を限定し分析を行った。まず、コロナ禍の 107 の動画を見て内容を書き出した。疑問点や不明な点は、動画撮影者である A 園の園長に聞き取りを行った。動画の内容は、どのようなテーマがあるか共通性を見出し小カテゴリーに分類した。さらに、この小カテゴリーから、A 園が YouTube を活用して情報発信することにより視聴者にはどのような情報獲得の効果があるのか検討し大カテゴリーに分類した。カテゴリー分けについては教育学の研究者と一緒に検討した。

(2) 倫理的配慮

研究対象である A 園の園長に、電話及びメールで研究の承諾を得た。研究の趣旨を伝え、結果は統計的に処理され、個人を特定するような研究ではないことを伝えた。なお、A 園では、通園している子どもの保護者と基本協定書を交し、YouTube 動画をあげることにについて承諾を得ている。YouTube 動画に関連する音源については、著作権フリーのものを使用している。また、この園が所在している市の監査を受け、YouTube 動画の内容のチェックも受けている。

3. 結果と考察

(1) カテゴリーの抽出

A 園が配信している YouTube 動画について、コロナ禍となった 2020 年 3 月 2 日から 2022 年 2 月 4 日までの期間に一般公開している 107 の動画を分析した。まず、コロナ禍 107 の動画を視聴し、動画内容を書き出した。この内容から 19 の小カテゴリーを抽出した。これらは、「1 子どもが造形遊びをしている姿(20)」「2 子どもが運動遊びをしている姿(11)」「3 子どもがクラス別の活動をしている姿(2)」「4 子どもが音楽遊びをしている姿(2)」「5 子どもが給食を食べる姿(2)」「6 子どもが自然と触れ合う姿(9)」「7 園内行事(14)」「8 園外保育(6)」「9 災害に対する安全指導の行事(2)」「10 外部講師による習い事(2)」「11 オンライン保育参観と屋外保育参観(9)」「12 保育者による遊びの紹介(4)」「13 感染対策の啓発(2)」「14 稲作活動(9)」「15 環境改善活動(3)」「16 園舎や園庭の紹介(3)」「17 遊具の紹介(2)」「18 子どもの視点から見た遊び(3)」「19 子どもの視点から見た生き物(2)」であった。

(2) 情報発信による効果の可能性

19 の小カテゴリーの抽出を行った後、YouTube 動画の一般の視聴者として、どのような情報を得ることができるか検討を行った。これらの YouTube 動画は、一般に向けて公開されているため、A 園に通園している子どもやその保護者だけではなく、これ以外の多くの人々に視聴されていることになる。視聴者のなかには、A 園が所在する地域の人々もいるだろう。A 園が、どのような保育を行い、どのような行事を行っているのかという視点で、地域の未就園児の家庭や近くに居住する人々も視聴する可能性が考えられる。また、A 園では、多くの行事や保育の場면을 YouTube で動画配信しているため、これらの保育に興味がある保育者や、幼児教育・施設に関わる職員など、視聴者は多岐に渡ることが予測される。つまり、通園している家庭の子どもやその保護者、A 園の地域の人々、幼児教育・施設の保育者等が視聴している可能性がある。このように様々な視点があることを考慮し、A 園が YouTube 動画を配信したことにより、視聴者にはどのような情報獲得があったのか、その可能性について検討を行い、カテゴリー分けを行った。19 の小カテゴリーから、6 つの大カテゴリーに分類した。それは、「A、園での普段の子どもの姿を見ることができる(46)」「B、園の行事や習い事について知ることができる(24)」「C、園の新型コロナウイルスへの対応方法や対策について知ることができる(15)」「D、園と地域が連携し継続的に取り組んでいる活動について知ることができる(12)」「E、園環境について知ることができる(5)」「F、子どもの視点で園の活動を疑似体験できる(5)」であった。YouTube の内容と情報発信に

よる効果について分類したものを表 1 に示す。

表 1 YouTube の内容と情報発信による効果

大カテゴリー	小カテゴリー	YouTube 動画の内容	抽出数
A、園での普段の子ども姿を見ることができる(46)	1 子どもが造形遊びをしている姿(20)	おもちゃの制作をする	5
		絵画制作をする	3
		七宝焼きの制作をする	3
		絵本の制作をする	2
		版画カレンダーの制作をする	2
		粘土遊びをする	1
		雛祭りの制作をする	1
		水時計の制作をする	1
		七夕飾りを制作する	1
	アルバム作りをする	1	
	2 子どもが運動遊びをしている姿(11)	いろいろな外遊びをする	9
		室内で様々な運動遊びをする	2
	3 子どもがクラス別の活動をしている姿(2)	入園直後の子どもが自分のクラスで様々な遊びをする	1
		子どもが、自分のクラスで歌を歌ったり制作をしたりする	1
	4 子どもが音楽遊びをしている姿(2)	音楽会の練習をする	1
		保育者のトランペット演奏に合わせて歌う	1
	5 子どもが給食を食べる姿(2)	カレー給食を食べる	1
		年齢に応じた離乳食や幼児食の給食を食べる	1
6 子どもが自然と触れ合う姿(9)	園庭で自然物を使って遊ぶ	7	
	園庭でセミ取りをする	1	
	園庭のブドウの収穫をする	1	
B、園の行事や習い事について知ることができる(24)	7 園内行事(14)	クリスマス会に参加する	5
		節分の豆まきに参加する	5
		正月の行事に参加する	2
		お泊り保育に参加する	1
		学校給食記念日の行事に参加する	1
	8 園外保育(6)	海の生き物観察に行く	2
		遠足に行く	2
		鯉のぼり見学に行く	1
		水族館見学に行く	1
	9 災害に対する安全指導の行事(2)	地震・火災避難訓練の行事に参加する	1
自衛消防訓練の行事に参加する		1	
10 外部講師による習い事(2)	英語教室に参加する	1	
	そろばん教室に参加する	1	
C、園の新型コロナウイルスへの対応方法や対策について知ることができる(15)	11 オンライン保育参観と屋外保育参観(9)	習い事のオンライン保育参観を行う	3
		クラスのオンライン保育参観を行う	4
		保護者が部屋の外から保育参観を行う	2
	12 保育者による遊びの紹介(4)	保育者が体操やダンスを見せる	3
保育者が Zoom でオンライン保育を行う		1	
13 感染対策の啓発(2)	園の新型コロナウイルスへの対応方針を解説する	1	
	マスクの付け方を説明する	1	
D、園と地域が連携し継続的に取り組んでいる活動について知ることができる(12)	14 稲作活動(9)	タブレットで稲の観察日記を作成する	3
		稲刈りをする	2
		田植えをする	1
		稲の脱穀をする	1
		稲の粃すりをする	1
		稲の精米をする	1
	15 環境改善活動(3)	自治体のキャラクターと一緒に環境問題啓発活動をする	2
エコ活動の表彰式に参加する		1	
E、園環境について知ることができる(5)	16 園舎や園庭の紹介(3)	園舎の紹介をする	2
		セミの鳴き声がする園庭の紹介をする	1
	17 遊具の紹介(2)	新しい遊具の紹介をする	1

コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性

		台風で退避していた遊具の紹介をする	1
F、子どもの視点で園の活動を疑似体験できる(5)	18 子どもの視点から見た遊び(3)	子どもがアクションカメラをつけて陣取り合戦をする	1
		子どもがアクションカメラをつけてボール遊びをする	1
		子どもがアクションカメラをつけて遊具遊びをする	1
		子どもがアクションカメラをつけて海の生き物を見る	1
	19 子どもの視点から見た生き物(2)	子どもがアクションカメラをつけてダンゴムシに触る	1

A. 大カテゴリーA「園での普段の子どもの姿を見ることができる」について

行事ではなく、普段の子どもの様々な遊びや、生活の場면을撮影されたものを「園での普段の子どもの姿を見ることができる」という大カテゴリーAに分類した。この大カテゴリーには、以下の6つの小カテゴリーが含まれていた。それは、「1 子どもが造形遊びをしている姿」「2 子どもが運動遊びをしている姿」「3 子どもがクラス別の活動をしている姿」「4 子どもが音楽遊びをしている姿」「5 子どもが給食を食べる姿」「6 子どもが自然と触れ合う姿」であった。

これらの動画は、コロナ禍のためマスクをしているが、楽しそうに造形遊びや運動遊びなどを行っている子どものリアルな姿が伝わってくる。大豆田(2013)は、多くの園が保護者への情報発信を大切にしているにもかかわらず、保護者にとって園はブラックボックスであると述べている²⁵⁾。そして、保護者は日常的に園でどのような活動が行われ、わが子がどう育っているのかを、ほとんど知らないことを指摘している²⁶⁾。つまり、コロナ禍前から園での活動内容が保護者に伝わっていないという課題があったことが窺える。しかし、これらの YouTube 動画を視聴することにより、保育者や友達とのかかわりが可視化され、何気ない日常の子どもの姿を見せることにより、保護者が安心し、園への理解につながるということが考えられる。これまで、参観日などの行事に参加しなければ見られなかった園での子どもの姿を YouTube で見ることができる。一般公開しているため、入園を検討している近隣の保護者にも、子どもの姿を見せることにより、普段どのような保育をしているのか理解できる。このような動画が頻繁に配信されることにより、我が子の入園後のイメージがしやすくなることが考えられる。また、同じ業種の園でも、子どもの姿から、保育者の保育を垣間見ることができ、保育の在り方を検討する機会になるのではないだろうか。

b. 大カテゴリーB「園の行事や習い事について知ることができる」について

例年行われている園内外の行事や、外部講師による習い事の場면을撮影されたものを「園の行事や習い事について知ることができる」という大カテゴリーBに分類した。この大カテゴリーには、以下の4つの小カテゴリーが含まれていた。それは、「7 園内行事」「8 園外保育」「9 災害に対する安全指導の行事」「10 外部講師による習い事」であった。

これらの行事の動画を配信することにより、視聴者には、普段の保育ではなく行事の様子を知ることができる。この園の遠足は、どこに行き、どのようなことをするのか。また、園内の行事はどのような形式で行われ、子どもは楽しむことができているのかなど、様々な視点で振り返り視聴することが可能である。汐見(2021)が述べていたように、本当に必要な行事なのか検討することもできる。厚生労働省(2019)の「子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～」によると、保育における行事は、子どもを中心に捉え、組織全体で現状や課題を検討することが大切であると述べている²⁷⁾。行事が子どもの負担になっていないか検討し、行事の在り方を振り返り、場合によっては改善していくことも必要である。すべての行事を動画に残しておけば、配信側の園にとっても、カリキュラムを検討する時の参考となる。行事のなかで、防災に関わる安全指導の行事は、必ず実施しなければならないが、現在日本で多いといわれている行事について客観的に判断できる資料にもなるのではないだろうか。

また、希望者が参加する英語教室や、そろばん教室など、保育・教育時間外の外部講師による習い事について知ることができる。鈴木(2010)の調査によると、親は子どもの年齢があがっていくにつれて、教育熱心になるが、年齢が低いうちは、習い事により、いろいろな体験の機会を作るよう意識している

ことを明示している²⁸⁾。YouTube 動画から、様々な体験の機会が得られる習い事について、講師の姿や子どもの活動に対する参加度も測ることができ、参加している子どもの保護者だけでなく、これから習い事教室の参加を考えている在園児の保護者にも参考となる。

c. 大カテゴリーC「園の新型コロナウイルスへの対応方法や対策について知ることができる」について

コロナ禍で工夫している保育の方法や、マスクの付け方を解説するなど、新型コロナウイルス感染予防についての情報を発信しているものを「園の新型コロナウイルスへの対応方法や対策について知ることができる」という大カテゴリーCに分類した。この大カテゴリーには、以下の3つの小カテゴリーが含まれていた。それは、「11 オンライン保育参観と屋外保育参観」「12 保育者による遊びの紹介」「13 感染対策の啓発」である。

対面保育が難しいときは、園と家庭をつなぐ方法を考える必要がある。野澤ら(2021)は、園長調査において、家庭への動画配信や公開保育等で約6割の園がコロナ禍をきっかけに ICT 活用に取り組んだことが示されたと述べている²⁹⁾。コロナ禍においては、リモートで行う活動に切り替えていかなければならないこともある。また、コロナ禍で在宅勤務となった家庭は、仕事をしながら、常に子どもと向き合わなければならない。子どもが園に通園しない日々が続けば、親のストレスも増大する。親子で遊べる動画を子どもと一緒に見て実践したり、一緒に保育者の動きに合わせて体を動かしたりすることにより、園とつながっている安心感が得られる。何よりも、なかなか会えない保育者とオンライン上でつながることは、親子にとって利点であると考えられる。Zoom で保育をした場面を、アーカイブとして YouTube にあげておけば、園が提供している遊びをいつでも家庭で実践することができる。

対面保育を実施するときは、新型コロナウイルス感染予防に努めなければならない。本来、保育参観は、部屋に入り、子どもの様子を後ろから参観するものであった。しかし、新たな保育参観の方法として、オンラインで参観する方法や、部屋の外から参観するという方法で、工夫しながら保育参観を実施していることを視聴者に発信できる。今後も勤務の状況により保育参観できなかった保護者が、いつでもその場면을視聴できるのは利点である。

その他、園で遊び道具をアルコール消毒する様子を配信したり、家庭での感染予防の啓発を行ったりすることにより、園の新型コロナウイルス感染予防に対する考え方が視聴者に伝わる。文部科学省(2020)では、「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」のなかで、正しい手洗い、咳エチケットの紹介や手洗い等のオンラインで情報発信を行っている幼稚園の事例を紹介している³⁰⁾。このように、新型コロナウイルス感染予防方法をリモートで伝えることで感染予防の啓発活動が可能になる。また、子どもを預けている保護者は、園がどのようにして新型コロナウイルス感染症対策をしているのか知りたいのではないだろうか。感染予防の方法について情報発信することにより、特に園の保護者の安心感につながると考える。また、他の幼児教育・施設においても感染対策の参考となる。

d. 大カテゴリーD「園と地域が連携し継続的に取り組んでいる活動について知ることができる」について

その日のみで終わる行事ではなく、継続的に地域とつながりを持ちながら行っている活動について撮影されたものを「園と地域が連携し継続的に取り組んでいる活動について知ることができる」という大カテゴリーDに分類した。この大カテゴリーには、以下の2つの小カテゴリーが含まれていた。それは、「14 稲作活動」「15 環境改善活動」である。

園が地域と連携することは、コロナ禍においても必要なことである。真田(2020)によると、幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査において、「人とのつながりを大切にしたいと思うようになった」と回答した保護者が8割以上おり、「コロナ流行に伴う悩みや気がかり」を聞いた設問でも、保護者自身が園や地域とのつながりを失ったことに悩む声が多くあがっていたことを示している³¹⁾。つまり、保護者は、コロナ禍において地域とのつながりは重要であると捉えていることがわかる。したがって、幼児教育・施設では、コロナ禍においても地域の様々な人との交流や活動を継

コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性

続的に行っていくことは大切なことである。

A 園では、SDGs の観点から、地域と連携し、ごみ問題をテーマにして考える活動をしている。複数回そのテーマで動画をあげておけば、継続性が見られ、園で主体的に取り組んでいることが見えてくる。また、この地域では土砂災害に見舞われ植えた稲が流されてしまい、それをプランターに植替育てるという活動をしている。特にその地域への情報公開の方法として、継続的に情報発信することにより、園が地域とつながろうと努めながら活動していることが理解されるのではないだろうか。

e. 大カテゴリーE「園環境について知ることができる」について

園舎の外観や部屋の配置、園庭の環境や遊具の紹介をしたものについて「園環境について知ることができる」という大カテゴリーEに分類した。この大カテゴリーには、以下の2つの小カテゴリーが含まれていた。それは、「16 園舎や園庭の紹介」「17 遊具の紹介」である。

園舎の部屋の中や園庭を撮影した動画をあげておくと、もし登園できない状況となっても、いつでも、自分のクラスの部屋をみることができ、少しでも登園した気分になれるのではないだろうか。また、コロナ禍により、未就園児の親子が園庭開放に参加できなかったとしても、園の環境を確認することができ、入園を検討するための情報となる。就職を検討している人にとっても、園訪問ができない時期に、園がどのようなところなのか、動画で視聴し検討することもできる。YouTube で、「園紹介」と検索してみると、鹿児島市の田上幼稚園など、10年以上前から園紹介について YouTube を活用し情報発信しているところもあり、コロナ禍前より、すでに動画で園の情報発信をしているところはあったようである³²⁾。2020年以降、園施設の紹介としてあげられている動画は飛躍的に多くなっている。

ハード面の園環境をいつでも視聴できる状態にしておけば、現時点で園と関わりがない人でも、この YouTube 動画を通じて、今後つながっていく可能性がでてくる。

f. 大カテゴリーF「子どもの視点で園の活動を疑似体験できる」について

子どもの頭部にアクションカメラを装着し撮影されたものを「子どもの視点で園の活動を疑似体験できる」という大カテゴリーFに分類した。この大カテゴリーには、以下の2つの小カテゴリーが含まれていた。それは、「18 子どもの視点から見た遊び」「19 子どもの視点から見た生き物」であった。

これは、子どもの視点で撮影されているため、子どもが、遊びの中でどのようなものを見ているのか、何に興味を持っているのか知ることができる。中西(2021)によると、子ども自身の学びにアプローチするためには、「何をどのように学ぶのか」という大人側の視点だけでなく、学ぶ主体としての子どもにも「何が見えているのか」という子どもの視点から学びを理解することが必要であると述べている。これらの動画は、子ども理解においても役立つものではないだろうか。アクションカメラを装着した子どもの視点で、様々な環境に関わっている姿がリアルに伝わってくる。

また、視聴することにより、その遊びの疑似体験ができる。このようなカメラアングルで撮られた動画は、もし、子どもが登園できない状況になったとしても、これを見れば園での活動の疑似体験が楽しめるのではないだろうか。直接体験が難しい今、YouTube 動画を見て遊ぶという間接体験の中で、リアルに近いものを感じることができると考える。

4. まとめ

本稿では、コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性について検討することが目的であった。今回は、A 園が一般に向けて配信している YouTube 動画を分析し、この視聴者にはどのような情報獲得の可能性があるのか検討を行った。一般公開されている A 園の 107 の YouTube 動画を視聴した後、その内容を分類し 19 の小カテゴリーを抽出した。そして、様々な視聴者の視点から、どのような情報獲得ができていのか検討を行い、6つの大カテゴリーを導き出した。それは、「園での普段の子どもの姿を見ることができる」、「園の行事や習い事について知ることができる」、「園の新型コロナウイルスへの対応方法や対策について知ることができる」、「園と地域が連携し継続的に取り組んでいる活動について知ることができる」、「園環境について知ることができる」、「子どもの視点で園

の活動を疑似体験できる」であった。これら 6 つの YouTube による情報発信の効果の可能性は、情報の受け手である視聴者の視点により、それぞれが有益な知見になるものと考えられる。

動画を通じて、子どもの姿を見ることは、園の職員と保護者の共通理解につながる。アーカイブとして残しておけば、子どもの成長の振り返りを行うことができる。園の主役は子どもである。園の子どもを多く情報発信することにより、当該園の保育の中身も垣間見える。同じように保育をしている他園にとっても参考となる情報である。保育の在り方から、自分がいる園の保育と比較することもあるかもしれない。A 園が作成した YouTube からの情報発信は、保護者などの園の関係者だけでなく、多くの人々が視聴することにより、また違った視点で情報をキャッチすることもあるだろう。それが、保育をさらによいものにする契機となる可能性もある。様々な幼児教育・施設がこのように情報発信をすることで、見えてくるものもある。

園の習い事や行事については、在園児の保護者やこれから入園を検討している未就園児の保護者にとっても有益な情報である。特に園で行われている習い事は、我が子にとって、楽しめるものなのか事前に検討することもできる。行事の動画は、保育者側にとっては、振り返りの材料となり、行事の在り方を検討する契機となる。

園の新型コロナウイルスへの対応や対策についての情報発信は、多くの園で実施していることである。これを視聴した他園の保育者は、改めて自園の対応方法と比較し、場合によっては改善できる。他の方法でよい方法があれば、園に助言することもできる。なによりも、つながり、情報のやりとりをすることで、さらに適切な方法が見つかり、園の感染対策のスタンダードが確立されていくのではないだろうか。

また、園と地域がつながって情報発信することは、コロナ禍においても重要なことである。このような時であるからこそ、地域と連携し、園がその活動の状況を発信することは、地域の人々にとって、心強いものとなるだろう。様々な課題を抱えているコロナ禍においても、幼児教育・施設が立ち上がり積極的に活動している姿をみせることが大事である。一般公開している YouTube は、この情報発信を行うことができる。

園環境について情報を発信することは、園が休園に至ったとしても、子どもにとって見慣れた保育室の様子を見て、登園した感覚を僅かでも感じることができないのではないだろうか。また、園の環境を撮影された動画は、入園を検討している子育て家庭にとっても参考となるだろう。

子どもの目線の高さで動画を配信することは、その視聴者が、動画の中の主役として活動に参加できるよさがある。コロナ禍で登園できない子どもも、動画上でリアルな遊びに入っていけると考えられる。

松本(2021)が述べていたように、新型コロナウイルスが様々な方面に負の影響がある点において、コロナ禍は災害と同じである。コロナ禍だけではなく、天災による災害時にも、YouTube 動画はネットが使える環境であれば活用できる。保育者や友達と直接関わることができないならば、園は間接的に家庭とつながることが必要になる。そのうえで、ICT の活用は必須となる。YouTube は、一つの便利なツールである。YouTube は、今や多くの幼児教育・施設で活用されているが、どのような視点で情報発信していくのかねらいを持って取り組むことにより、視聴者に伝わりやすいと考える。動画のタイトルも視聴者にわかりやすい表現にするとよいのではないだろうか。何歳児なのか、どのクラスなのか、何をしている動画なのか表記しておくこと、より視聴者にわかりやすくなる。

日常の保育や行事等の YouTube による情報発信は、保育の振り返りにも活用できる。また、他の幼児教育・施設の視聴者は、この園の様々な取り組みを見て保育に活かすことができるのではないだろうか。例えば、手書き文化の幼児教育・施設が、これを活用することにより、瞬時にすべての保護者に園の活動を報告できる。動画を配信する時には注意が必要ではあるが、園内の複数の保育者の視点から、動画を配信することもよいのではないだろうか。このように YouTube での情報発信による様々な可能性があることが考えられる。一方で、これを活用することについての課題も検討する必要がある。

る。

5. 今後の課題

今後は、次のような調査研究が必要である。コロナ禍において、幼児教育・施設の情報発信は大切なことである。今回は、A園が情報発信することにより、視聴者には、どのような効果の可能性があるのか検討を行った。今回の検討による内容をもとに、この園の保育者と保護者にアンケート調査をしていきたい。また、詳細な効果の検証については、視聴者の属性の分析や継続的な調査が必要である。これにより、YouTube の情報発信による具体的な効果と課題が見えてくる。

今回、YouTube に絞って分析を行った。他にも情報発信の方法としては、Zoom など様々なツールがある。多くの園で、これらは組み合わせて配信されていることが考えられる。YouTube の特性上、オンデマンド配信が主な機能である。Zoom のようにライブ配信による情報発信の効果や、これらの組み合わせた情報発信の効果についても検討の必要がある。また、今回は認定こども園一園のみの分析であった。様々な園の情報発信の形をみて検討することも必要であると考えられる。

本研究で分析した動画内容と類似した情報を発信している園も多く存在するが、視聴者へよりよい視聴効果を生じさせるための動画の作成や、発信の仕方についても検討することが必要である。情報発信の意義や効果の可能性については検討してきたが、情報発信の効果とは、視聴者が視聴している瞬間のみといった単一的なものではなく、保育活動などと繋がるための補間的な役割も果たすことが望ましいと思われるため、複合的な要素をもっていることが重要であると考えられる。したがって、今後は、園からの情報発信だけでなく、通常の保育活動との接続の在り方についても検討していきたい。

引用文献

- (1) 松本麻希 (2021) 新型コロナ禍 (COVID - 19) と東日本大震災から学ぶもの ―コミュニティの危機による影響と災害支援に関する一考察―. 西九州大学子ども学部紀要. 12. 24-31.
- (2) 厚生労働省 (2020) 保育所等において新型コロナウイルス感染症が発生した場合の対応について <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000598105.pdf> (情報取得：2022年2月20日)
- (3) 内閣府 (2020) 認定こども園における新型コロナウイルスへの対応について. <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/pdf/kodomo/200312.pdf> (情報取得：2021年2月20日)
- (4) 文部科学省 (2020) 新型コロナウイルス感染症防止のための学校の臨時休業に関連しての幼稚園の対応について. https://www.mext.go.jp/content/202002228-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf (情報取得：2022年2月20日)
- (5) 同上
- (6) 鮫島 良一・甲田 美香 (2021) コロナ禍における附属三松幼稚園年長クラスの子ども達と担任が紡ぐ. 保育実践鶴見大学紀要保育・歯科衛生編. 3(58). 41-48.
- (7) 小山祥子 (2021) 新型コロナウイルスによる休園中の園対応と園児の生活. 駒沢女子短期大学紀要. 54. 1-18.
- (8) 厚生労働省 (2020) 保育所等において子ども等に新型コロナウイルス感染症が発生した場合の対応について (第二報). https://www.jpeds.or.jp/uploAds/files/20200225mhlw_hoikujo_COVID19_tAiou2.pdf (情報取得：2022年2月21日)
- (9) 池本美香 (2020) コロナ禍で明らかになった子ども・子育ての課題―ニュージーランドとの比較を踏まえて―税・社会保障シリーズ. 日本総研. 45.
- (10) 境 愛一郎・栗原 啓祥 (2021) コロナ禍による登園自粛を巡る保育者の経験と意識および価値観の変遷. 国際幼児教育研究. 28. 19-34)

- (11) 同上
- (12) 汐見稔幸(2021)【特集】コロナ禍で顕在化した課題をともに考える新しい園づくりに向けた第一歩. これからの幼児教育 2021 年度春号. (株)ベネッセコーポレーション
https://berd.benesse.jp/up_imAges/mAgAzone/KORE_2021_spring_toku.pdf
(情報取得: 2022 年 2 月 21 日)
- (13) 同上
- (14) 前掲(12)
- (15) 文部科学省(2020) 幼児教育の振興について.
https://www.mext.go.jp/content/20201023_mxt_sigAkugy_1420538_00002_0005.pdf
(情報取得: 2022 年 2 月 22 日)
- (16) 厚生労働省(2016) 保育所等における業務効率化推進事業の実施について.
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dAtAIId=00tc1584&dAtAType=1&pAgeNo=1
(情報取得: 2022 年 2 月 22 日)
- (17) 内閣府(2021) 新型コロナウイルス感染症 対策支援事業 ICT 化推進事業.
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/Administer/qA/pdf/210202_ict-fAq.pdf
(情報取得: 2022 年 2 月 22 日)
- (18) 文部科学省(2020) 新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集.
https://www.mext.go.jp/content/20200512-mxt_youji-000005336_002.pdf
(情報取得: 2022 年 2 月 22 日)
- (19) ベネッセコーポレーション(2021) 新型コロナウイルスの影響で登園できない子どもたちの生活リズムを守る. https://blog.benesse.ne.jp/bh/jA/news/20200416_releAse.pdf
(情報取得: 2022 年 2 月 22 日)
- (20) 高橋大輔(2021) 動画配信者としての子ども. 社会科学論集. 茨城大学人文社会科学部. 7. 23-40.
- (21) 室田泰弘(2007) YouTube はなぜ成功したのか、世界を席卷するモンスター・メディアの正体. 東洋経済新報社.
- (22) 渡辺恵美衣(2018) 「YouTuber」という職業—開かれた場での新しい発信の形—早稲田社会科学総合研究. 別冊 2017 年度学生論文集. 188-199.
- (23) 社会福祉法人国立保育会(2021) 社会福祉法人国立保育会情報公開・開示規程.
https://www.YouTube.com/wAtch?v=0KtSPH5_hAc (情報取得: 2022 年 2 月 23 日)
- (24) 大阪市港区区役所(2021) YouTube 動画で港区保育施設を紹介します.
<https://www.city.osAkA.lg.jp/minAto/pAge/0000544220.html> (情報取得: 2022 年 2 月 23 日)
- (25) 大豆生田啓友(2013) インタビュー「学び・育ちの物語」で園を「見える化」する. 第 1 特集 子どもの育ちの「見える化」で保護者にもっと信頼される園になる. これからの幼児教育. 夏. Benesse 次世代研究所. 2.
- (26) 同上
- (27) 厚生労働省(2019) 子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～. <https://www.mhlw.go.jp/content/000521634.pdf>
(情報取得: 2023 年 3 月 22 日)
- (28) 鈴木尚子(2010) 幼児の塾や習い事-スポーツは 5 歳から. Benesse 教育研究開発センター . 58 . 56-65.
- (29) 野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美(2021) 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 60. 545-568.
- (30) 前掲(18)

コロナ禍の幼児教育・施設における YouTube 活用の可能性

- (31) 真田美恵子(2020) 「幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査」より
コロナ禍を受けて「つながり」を求める保護者の姿が明らかに. これからの幼児教育. 秋. 8-9.
- (32) 鹿児島市田上幼稚園(2009) 紹介用ビデオ <https://www.YouTube.com/watch?v=9uSeLZcobgM>
(情報取得: 2023年3月23日)
- (33) 中西さやか(2021) 「子どもの側」から乳幼児期の学びを読み解く視点とは: Bildung (ビルドゥング) 概念を手がかりとして. 社会福祉学部論集. 佛教大学社会福祉学部. 17. 97-107.

謝辞

本研究に快くご協力いただきました認定こども園の園長先生に、心より感謝申し上げます。お忙しい時に、質問に対してご回答いただきありがとうございました。また、コロナ禍のなかで、査読をしてくださった先生方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

付記

本研究は、「コロナ禍におけるオンライン保育の可能性—効果と課題—」について、令和3年度山陽学園大学・短期大学の学内研究補助金の助成を受けて行った研究の一部である。